り、葛西の猿ケ俣等あふれて、千壽葛西領かけて、この川に四萬石餘皆無したりし也、

〔江都管鑰秘鑑四〕永代橋新大橋之内、御取拂被仰出候事、幷永代橋町人共願ひに付、町懸りになる事、

新大橋掛直し御普請被仰付たる同年、享保四年永代橋も同く大破に及びければ、町奉行見分の上、書付を以て言上、其文面にいはく、

一永代橋、新大橋共見分仕候處、大破ニ而御普請無御座候ては相成難く、御修覆には難成奉存候、

一永代ばし新大橋、總じて橋杭は水際よりくさり、其外諸道具共打損じ、往來危キ體に相見へ申候、

一永代橋は新大橋より橋も高く、木道具も丈夫に御座候間、御普請被仰付候節、新大橋よりは御入用も過半相增可申と存候、以上、

亥ノ三月

中山出雲守
大岡越前守
丸毛美濃守
鈴木伊兵衛

右之上書、御老中方御一覽之上、再三御評議をこらされける、御上如何ニ決斷御座候にや、永代橋新大橋の内、壹箇所取拂に被仰付候由、町奉行、御勘定奉行、御勘定吟味役等打寄評議これあり候て、猶亦上書を捧ぐ、

覺

一永代ばし新大はし兩橋の内、壹箇所取はらひに被成候義、見分之上了簡仕候處、永代ばし御取はらひ、新大はしは差被置可然と奉存候、新大はしは本所中ほどにて御座候、火事等之節兩國